Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-22

Book Review 戦争被害の多重性を台湾のアウトローの活躍を通して活写した直木賞受賞作[流 東山彰良・著,ラスト・バタリオン : 蔣介石と日本軍人たち 野嶋剛・著]

梶谷, 懐

(Citation)
外交,33:140-143

(Issue Date)
2015-09

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003911

【選評】
神戸大学大学院教授
梶谷懐

戦争被害の多重性を台湾のアウトローの活躍を通して活写した直木賞受賞作

流
東山彰良・著
講談社／2015年／1600円＋税

戦後七〇年を迎える二〇一五年八月、安倍首相による歴史認識に関する談話が発表された。これに先だって公表された21世紀構想懇談会の報告書では、一九三一年の満洲事変以降の日本政府の政策の誤りとその帰結としての侵略戦争が厳しく批判された。安倍談話では、この有識者懇談会による戦争への認識がほぼ踏襲され、反省の意思が示された一方で、明治以降の近代化や、戦後における経済的繁栄を、一九三〇～四〇年代の経験とは切り離して高く評価しようという姿勢も目立った。

この談話については、保守的な価値観を持つ首相が、欧米の価値観とも一致するリベラルな歴史認識を発表したことを評価する声がある一方で、植民地支配に対する反省を欠くのではないか、という批判も見られた。

本稿で、この談話の評価についてこれ以上踏み込むつもりはない。ただ、このような首相による談話が、何よりも戦争責任についての権力による公的な「線引き」という性格を持つことに注目しておきたい。すなわち、甚大な被害を与えた過去の戦争について、ど

こからどこまでが当時の政府の「罪」として非難されるべきなのか。そしてその「贖罪」の責任の、どの程度までを現在の日本政府が負っているのか。それをできるだけ明確にしようとする意思がこれらの「談話」には働いている。だからこそ、それは内外から大きな注目を集めるのだと言えよう。

このような「線引き」を行わなければならないのは、戦争に関する責任を果たすことが、民間を含む多くの関係者の利害に関わるからである。そうである以上、公人による過去の戦争に対する認識の表明は必ず政治的な色彩を帯びる。戦争被害からの救済にあたっては金銭的なものだけではなく、「尊厳」の回復も含まれることが、公人による歴史認識の政治性を一層鮮明にする。そして当然のことながら、政治的な立場によってその「線引き」を批判する者も出てくれれば、肯定する者も現れる。戦後七〇年たった現在、首相談話に象徴される歴史認識についての議論が絶えないのは、そのような公的な救済の問題が現在においてもなお終わっていないことを物語っていよう。

しかし、戦争体験とは、そのように、政府によって公式に線引きがされたり、公的な救済がなされたりするものばかりではない。そしてそれは歴史認識をめぐる政府の公式な語り口とはまた別の語られ方を必要とする。それは個人的なライフストーリー、あるいは文学の形をとる以外にないのかもしれない。

「公的救済」から外れた人々

平成二七年度上期の直木賞を受賞した東山彰良の『流』は、一九七〇年代、戒厳令下の台湾を舞台とした青春小説である。物語は主人公が高校の時に起きた、祖父の殺人事件の真相追及をめぐるミステリーを軸に、主人公の恋と友情、そしてケンカの模様が生き生きと描かれており、終始読者を飽きさせないエンタテインメントとして、受賞前から話題作となっていた。

著者の東山は主人公と同じく大陸から台湾に渡ってきた父を持ち、五歳まで台湾で生活した。日本の一般読者にとって必ずしも馴染みのないはずの、台湾や大陸中国の地名や人名が頻出するこの小説が直木賞を受賞したことは、研究者として中華圏に関心を持ってきた評者にも感慨深い。一方で評者は、この「小説」は、戦争被害とその救済という重いテーマを扱う、もう一つの顔を持つ作品としても読むことができるのではないか、と考えている。

冒頭、一九八〇年代に主人公が初めて祖父の故郷である中国山東省を訪れるくだりで、主人公の祖父が日中戦争

時に日本軍に協力関係にあった村の住人を惨殺したという情報がいきなり読者に示される。物語が進むにつれて明らかになるように、この情報は、祖父が殺害された背景とも深いつながりを持っている。

それはともかく、このような戦時下に生じた住民の惨殺は、明らかに悲惨な戦争被害の一例であるはずだ。だが、物語で描かれる戦争被害は、決して公的な救済の対象となることはない。まず、被害者たちが絶対的な「敵」である日本軍と内通していた「漢奸」だとみなされており、それゆえに公的には決して「被害者」とはみなされない存在であった。また、物語の一つの重要な背景として、当時の台湾＝中華民国が大陸中国との内戦モードにあったことも挙げられよう。内戦の「終結」を迎えていない以上、台湾と大陸中国との間で、戦争被害に関する公的な「線引き」が行われる状態にはない。また、戦争被害のきっかけをつくった日本と中華民国は一九七二年に断交している。すなわち、この物語の舞台となった七〇年代の台湾は、戦争被害の傷跡が生々しく残る一方で、その救済を公的に担う主体が不在の状態にあったのである。

アウトローが担った「救済」

被害からの救済が公的に行われる可能性がない以上、それが行われるには被害者が私人としての自力救済に乗り出す必要がある。しかし、暴力による問題解決の手段を「国家」が独占する近代国家において、そのような「自力救済」を行おうとすれば、ヤクザのようなアウトロー、すなわち法的秩序の埒外に置かれた存在になるしかない。

この小説には、頭は決して悪くはないが、やたらとケンカっ早い人物が数多く登場し、彼らによる切った張った の暴力シーンが多く登場する。彼らはみな公的な権力に頼ることを潔しとせず、自らの腕力と胆力に頼って「自力救済」を行おうとする、半ばヤクザのような存在なのである。そのような徹底した自力救済への強い意志は、何よりも警察に頼らず、己の力のみを頼りにして祖父殺しの謎に迫ろうとする主人公に体現されている。そのようなアウトローたちの活躍から浮かび上がってくるのは、戦争の傷跡からの「自力救済」を必要とする、当時の台湾社会の姿なのではないだろうか。

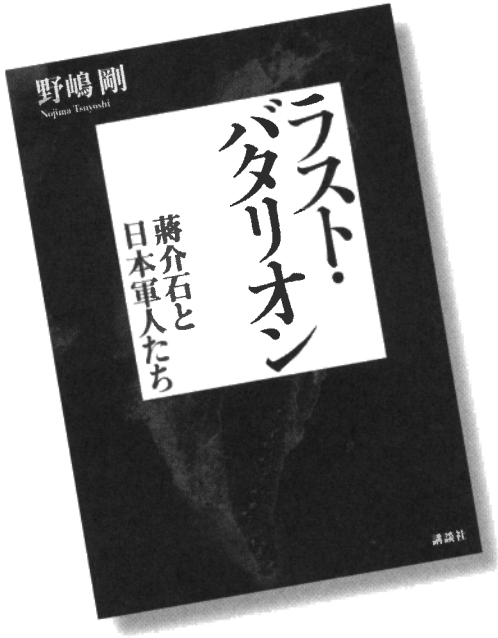
蔣介石軍顧問は旧日本軍将兵

一方、『流』においては必ずしも前面には出てこないが、戦後台湾社会における戦争の傷跡とそこからの救済を語る上で、「影の主役」ともいえる存在は、かつて植民地支配と大陸中国へ

の侵略戦争の主体だった旧日本軍と日本人だったはずだ。

その冷戦期の台湾における戦争の傷跡を語る上で欠かせない「影の主役」＝旧日本軍の果たした役割に焦点を当てたのが、野嶋剛による渾身のノンフィクション『ラスト・バタリオン』である。この作品は、旧日本陸軍の将校たちが、蔣介石の軍事顧問団「白団」として国民党政府の「大陸反攻」政策の一翼を担っていた事実を、近年公開された蔣介石日記の解読と、関係者への綿密な取材により明るみに出したものである。アメリカからも警戒の目をもって見られた「白団」が、戦後一九六〇年代後半まで活動を続けた背景には、日本軍と日本人の強さ、勤勉さに対する蔣介石の高い評価があったという。白団のメンバーはいずれも旧日本軍の中で高い地位に上り詰めた軍属である。その存在が戦後の日本社会で忘れ去られる一方で、かつての敵国である中華民国の政治体制の中で非公式の存在、いわばアウトローとして一定の役割を果たしていったという事実には、「歴史の皮肉」といった言葉を超えた因縁の深さを感じざるを得ない。

国家権力が強く関与しながら国家の枠外にあるという複雑な位置に置かれた白団の存在は、『流』で描かれた戦争被害とともに、戦後の東アジア社会において戦争に関する公式な線引きとそれに基づく救済がいかに難しいものであったか、ということを物語るものである。戦後七〇年を迎えるにあたって、日本に住む私たちは、国家という公的な線引きの中で救済され得なかった戦争被害者の存在にも、改めて思いをはせる必要があるのではないだろうか。●



ラスト・バタリオン
野嶋剛・著
講談社／2015年／2500円＋税